

2004年5月16日(日)

Esquire の鞆とこだわりのネクタイ (天下堂洋品店)

Reference: Result adds up little by little. (Keinan Iwamura, NHK Let's Speak English)

昨夜は夜半過ぎから雨になった。

サンライズエージェンシー代表の牧野さんの車で関越・北陸自動車道と交代で運転してきたのが昨日の朝だった。牧野さんは、徹夜に近い仕事を終えて仕事先の川崎から川越まで迎えに来てくれたわけで、相当にお疲れだっただろう。

宵山と呼ばれる午後七時半の山車のけんか(地元では「かっちゃ」という)を見てから、下町の親戚に上がりこんで平目の昆布メのおさしみに舌鼓を打ちながら、祭りの宴会を楽しんだ。

その後、牧野さんを伏木駅まで見送ってから自宅までの道を20分ほど歩いたが、道の両側の風景は30年前とほとんど変わっていない。

所々に電灯があるが、夜の闇にその老いた町並みのくすんだ色や痛んだ外壁は隠されている。

昼の町並みが夜は少し生き返ったように思えるのは、祭りの興奮と周りの暗い闇にあるようだ。

家に帰ると老いた母がお茶を煎れてくれて、私がお土産に持ってきた川越のお菓子を一緒に食べた。父はダンスのレッスン日で十一時半過ぎの帰宅になるらしい。

川越からの車の運転の疲れも出たのか、父が帰る前に寝入ってしまった。

雨の音だけがポツリポツリと意識の中に残った。

今朝は父が雨の中を牧野さんの宿泊する高岡マンテンホテルまで車で送ってくれた。

途中、祖父母の墓参りをする。

富山市岩瀬にあるコモン天下堂では、K氏がストーブに薪を焚きながら、いつものように「ようきたねー」と笑顔で迎えてくれた。

K氏は先代から引き継いだ天下堂の本店は富山市総曲輪(そうがわ)通りにあった。

私が昨年3月に帰省した時は、この総曲輪通りのお店でお会いした。

おりしもノーベル化学賞を受賞された田中耕一さんが富山市の出身ということもあり、富山全日空ホテルでの祝賀パーティのお話をお聞きすることができた。

そのパーティの実行委員の皆さんが田中耕一さんにパーティの席上で何を贈ろうかと相談した時に「それはK君に任せればいいだろう」ということになり、K氏がお祝いの品物を用意することになったそうである。



そのパーティで田中耕一さんに贈られた品物とは、エスカイヤーのバッグだった。

日本の武士もそうだったが、昔、馬に乗った武士（西欧では騎士）は隊長であり、戦士であった。その騎士にとって、馬を乗りこなすための馬具はとりわけ貴重な道具である。

その馬具の歴史とエスカイヤーは切っても切れない関係があるという。

このテーマだけでも書ききれないほどのエピソードになることだろう。

いつかK氏のエッセーでこのあたりは紹介したい。

このK氏のお店「天下堂洋品店」で扱う品物は、エスカイヤーや北欧のしっかりした製品だけとは限らない、K氏が選んだ生地一本づつ富山の職人が作るネクタイがある。

このネクタイは私の愛用品でもあるので、ここで紹介したい。

ネクタイを締めるとき、皆さんはどんな気持ちでネクタイを締めるだろうか？

あー、これから仕事だ、なんとなく憂鬱だ。

さー、これから仕事だ、頑張りなくちゃ。

うーん、昨晚は飲みすぎたな、今日はきついぞ。

私はいつも、朝の散歩から帰ってシャワーを浴びた後、今日お会いする人を頭に描きながらスーツとワイシャツを用意し、最後にネクタイを2本取り出してから、妻か娘に「どちらがいい？」と聞くことにしている。

そー、ネクタイは家族のコミュニケーションの道具なのだ。

帰りが遅い日は家族が寝静まっていることもあり、朝のその会話だけがお互いの元気の確認であることも多い。

「今日は天下堂なのね」と家族に言われる場合は、結構重要な打合せの日が多い。

<ここからは宣伝となります>

天下堂洋品店で販売している「Esquire の鞆」については、次ページのエッセーをお読み下さい。

また「こだわりのネクタイ」は生地からお選び頂けます。

前述の牧野さんも買い求めて、お気に入りとのこと、近日常に牧野さんの会社のホームページ (<http://www.sunrise-ag.com>) にてご注文方法をご案内する予定です。

ちなみに写真のネクタイは当方のもので、一本8,000円台で入手したものです。



つづく

## ESQUIRE

ある日、清々しい空気をまとった精悍な男の客。  
彼はこの店のショーウィンドーに並んでいるエスカイヤーの革製品に、驚いてはいつてきたという。  
彼はドイツで馬術の勉強をしていた。20年前、彼が馬術留学を終えて、ドイツから日本へ帰る時、その記念に一台の将校靴を買おうと思った。その靴を買った店には、このエスカイヤーのほかにもうひとつ日本でも有名なブランドの靴があり、どちらにしようか迷った。  
彼は当時エスカイヤーの名を知らなかった。  
そんな彼を見て、店の人が、「エスカイヤーをおつかいなさいと」迷わず奨めてくれて、エスカイヤーを選んだという。

それから20年。使うほどに愛着が出るその将校靴は、しなやかで新しいときにはなかった風格が出てきたという。  
今もお気に入り大切に使っているという。  
ドイツでしか見ることがなかった革製品の名品エスカイヤーが富山の小さな洋品店にある。  
それで、驚いてはいつてきたのだという。

エスカイヤーは、日本のブランドブームには乗らなかった。  
なぜなら、彼らは自分たちの生産量以上の数を作れない。  
私たちはそこにエスカイヤーの良心を感じるのです。  
それは、丁寧に鞣された革やその縫製にみるごとく、人間のために革を提供してくれた生命への深い感謝に尽きるように思えるのです。  
ちなみに、その青年は、富山の馬術競技会で優勝していた。

**天下堂洋品店（富山）**  
**同品は岩瀬富山港店「コモン天下堂」にあります。**